

第一朗読：エレミヤの預言(エレミヤ23・1-6)；群れの残った羊を集め、彼らを牧する牧者をわたしは立てる
答唱詩編：(詩編23・2+3、4、6)；主はわれらの牧者、わたしは乏しいことがない。
第二朗読：使徒パウロのエフェソの教会への手紙(エフェソ2・13-18)；二つのものを一つにされたキリストは、わたしたちの平和である
アレルヤ唱：(ヨハネ10・27)；羊はわたしの声を聞き分け、わたしもその羊を知り、羊はわたしに従う。
福音朗読：マルコによる福音(マルコ6・30-34)；イエスは飼い主のいない羊のような有様を深く憐れまれた

「使徒たち」ということばから今日の福音は始まっています。「使徒」ということばはマルコによる福音では2回だけ使われています。3章の「十二人を選ぶ」というところと今日の箇所です。3章では「そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった」と述べられています。イエスによって「遣わされた者」となった者の使命は、神の国を宣べ伝え、悪霊を追い出すことです。イエスが行ってきたことを同じように行っていく者だということです。この「遣わされた者」という意味の「使徒」というのはわたしたち自身の姿であるともいえます。先週、使徒たちは二人ずつ組みにして遣わされました。つえ一本だけもって宣教し、悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやしました。

わたしたちもイエスから派遣されて社会の中で歩んでいます。そして様々な社会の場からイエスのもとに帰ってきて集うのがこの「主日のミサ」と言えると思います。ここでわたしたちが派遣されたところで自らが行ったことや実際に起こったこと、その場で感じたことをイエスに伝えるのです。「使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した」のです。イエスはわたしたちの話したこと、行ってきたことをまず聞いてくださいます。わたしたちもイエスに残らず分かち合うことがミサで集う目的であると言えます。この社会の中で喜んだり、悲しんだり、傷ついたり、泣いたりしたことがあると思います。それを使徒たちがしたようにわたしたちも分かち合うのです。ミサにあずかるというのは、ともすれば教会に集って神の教えを聞くだけに終わってしまいがちです。それだけではなく、二人三人が集まるところにイエスはそこにおられるのですから、お互いに1週間の間自分が行ってきたことやどのような出会いがあったかなどを分かち合うことが大切なことではないでしょうか。

ところで、この場面では、使徒たちがどのような成果を上げたのかについては述べられていません。しかし、イエスが「しばらく休むがよい」と言っておられることから大変な成果を上げたと考えられます。その成果によって、「出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったから」です。イエスが「しばらく休むがよい」ということばを述べられているのは重要です。マタイ福音書でも「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われています。イエスのもとで休むということは、宣教によって疲れた者がミサに集い、こんなことがあったあんなことがあったとイエスに報告することでもあるとも言えるでしょう。

さて、使徒たちは休むために「自分たちだけで人里離れたところへ」行くのですが、そこにも群衆が押し寄せてきました。イエスは大勢の群衆を見て、「飼い主のいない羊のような有様」と感じます。羊は弱い動物で、群れから離れると死んでしまいます。飼う者がいない羊の群れは散り散りになり、野のけもの餌食となります。そのような人々に対してイエスは深くあわれまれたのです。「迷い出た羊のたとえ」で、百匹の羊のうち一匹が迷い出たとすれば九十九匹を残して一匹を探しに行くという話があります。どんなに小さな一人でも軽んじないようにイエスは教えられます。イエスのあわれみは人びとの姿を見て、心の底から揺さぶられて、その人のことを自分のことのように感じるものです。目の前の人の苦しみを見たときに自分のはらわたが揺さぶられるような、そんな感覚です。イエスの行いの原点にはそのような感覚があるのです。わたしたちもイエスのような共感する感覚を大切にイエスの歩まれた道とともに歩んで行きましょう。